

「正義を行う」ことへの召し

'95 日本聖公会宣教協議会 聖書研究

1995.8.29 ヨハネ 井田 泉

1. はじめに

今、司会の方がおっしゃった資料集のことについて少しお話しします。この6年ほどの間、私は10人くらいの人たちと一緒に、1945年までの日本と朝鮮のキリスト教関係史の資料編集の仕事をしてきました。それが今週『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』という名で新教出版社から刊行されるはずで、900頁近いものになりました。その中から一つだけ印象的なものをご紹介します。それは、1930年代後半、日本が朝鮮の教会に対して神社参拝を強制したとき、朝鮮の長老派、平壤の山亭峴教会という教会に対する日本当局の弾圧を伝える新聞記事です。この教会の牧師朱基徹は神社参拝反対で逮捕されており、信徒たちは毎週力を合せて礼拝を捧げていました。その教会に対して当局は、「宣教師に説教させるな」「何日何時までに神社参拝を決定せよ」と次々に命令してきます。そんな中である日曜日、ある長老が説教することになっていました。ところがその礼拝の前に婦人信徒数人がその長老のところに来て、こう言ったのです。「私たちは姿勢のはっきりした、命懸けの説教を求めている。あなたのような姿勢のはっきりしない人は説教しないでほしい」。それでその長老は「そこまで言われて説教できない」と言い、その日の礼拝は混乱状態になった。こういうことが当時の『東亜日報』という一般新聞に書かれていました。山亭峴教会はやがて強制的に閉鎖されてしまいます。この教会の朱基徹牧師は拷問による衰弱の果てに獄死しました。こうした歴史資料は、私たちの教会のあり方について深く考えさせるものを持っています。

さて、昨日の開会礼拝でイザヤ書第11章1-5節が読まれました。救い主とはどのような方であるかを語っている箇所です。そこに「正義」という言葉が出て来ました。

「エッセイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊。彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」

この時間、まず初めに「正義」という言葉が聖書でどのように用いられているかを尋ねてみたいと思います。

2. 神の民の出発と「正義を行う」ことへの召し

新共同訳で「正義」と訳された箇所は、旧約聖書 (מִשְׁפָּט מִצְדִּיקִים など) に96、新約聖書 (κρίσις, δικαιοσύνη など) に14、計110箇所あります (英語では **righteousness, justice** など)。旧約聖書続編には33あるので、これを含めれば聖書全体には143箇所になります (ちなみに「愛」と訳された箇所は続編を除き523節)。

新共同訳聖書で「正義」と訳された最初の箇所は次の所です。

- ①創世記 18:18-19「アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。』」

アブラハムとサラから始まった神の民への召命がここに示されています。その神の民への召命とは、一言で言えば「正義を行う」ことです。これは創世記第12章に示されたアブラハムへの召命、「あなたは祝福の源となるように」(12:2)という約束の再確認でもありません。ここで注意したいのは、アブラハムの子孫、つまり神の民イスラエルのみが祝福されて他はどうでもよい、というのではなく、世界のすべての国民の祝福が関心の的になっていることです。「あなたがたは、私に従い、正義を行うことによって世界に対する祝福の器となれ。」これが主の召命でした。アブラハムとその子孫、神の民は、世界の人々が祝福を受けるために仕える器、道具として召されている。そしてそれは、神の民が「主の道を守り、主に従って正義を行う」という歩みをするを通して実現して行く。もし神の民が「主の道を守り、主に従って正義を行う」という生き方をせず、それを踏みにじるのであれば、それは神の民の使命に逆らうことになり、自らの祝福を損なうばかりか、世界に対する神の祝福をも損なうことになってしまう。

ところで、このように「主に従って正義を行う」ことへの召しが述べられているこの聖書の箇所には、特別な文脈があります。ただ創世記 18:18-19 の言葉がそこだけ急に教えとして出て来たというのではなく、創世記第18章全体の流れの中でこのことが語られている点に注目したいのです。

アブラハムが主の呼びかけを聞いて歩み始めてからおよそ25年の歳月が過ぎました。子孫への祝福の約束も受けたのに、子供は与えられない。すでにアブラハムは99歳、サラは89歳。ある日、暑い真昼に、アブラハムの天幕の前を3人の旅人が通りかかりました。アブラハムは旅人を迎え入れ、サラとともに接待をしました。そのとき3人の旅人の一人が、「来年の今頃、サラには男の子が生まれているだろう」と言います。アブラハムへの神の約束がここでようやく実現しようというその重要なときに、先ほどのこと、つまり「正義を行うことへの召し」が語られたのです。主は彼に言われました。1年後、あなたがたに子供が生

れる。子孫が与えられる。そこには私があなたとあなたの子孫に与える大切な使命がある。

「主の道を守り、主に従って正義を行う」ことをあなたは生れる子供に必ず教えなければならない。そしてそれを代々受け継がせていかななくてはならない。正義を行うことを通して、あなたとあなたの子孫は祝福を世界に広げていくのだ。

そしてそこで言われた「正義」というのは、抽象的な、漠然としたものではありませんでした。主がアブラハムのところに来られたこの時の目的は、ソドムとゴモラの罪の現実を確かめることでした。このことが重要です。

「その人たちはそこを立って、ソドムを見下ろす所まで来た。アブラハムも、彼らを見送るために一緒に行った。主は言われた。『わたしが行おうとしていることをアブラハムに隠す必要があるか。アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。』

主は言われた。『ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。』」（創世記 18:16-21）

「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫び」「わたしに届いた叫び」。これはこの町の中で苦しんでいる人たちの叫びではないでしょうか。この町の故に苦しみを強いられている人々の訴えではないでしょうか。フォン・ラートという人によれば、「訴える叫び」と訳されたもとのヘブライ語「ゼアーカー」**זַעֲקָה**! というのは法廷で用いられる専門用語で、「権利を著しく侵害された者が挙げる助けを求める叫び」という意味なのだそうです。

そこには正義が踏みにじられている、という現実があった。性的犯罪を含めて、あつてはならない虐待、不法、暴虐がこの町に行われていて、その故に苦しむ人たちの叫びが天に届いた、ということではないでしょうか。

ソドムとゴモラから上がる訴えの叫びを聞かれた主は、その現実をご自分で見て確かめようとされます。

天から地上へ、人の姿となって主はおいでになりました。ソドムに行くその途中、主はアブラハムの天幕を尋ねられました。アブラハムの天幕はヘブロンHebronの北、マムレという所がありました。標高約900メートル。ソドムへは、そこから東へと山道を下ります。山道の途中、死海とその東のほとりのソドムを見下ろすことのできる場所で、あのアブラハムと主の対話がなされます。そしてアブラハムと別れて、主はソドムにまで道を下っていかれます（創世記 18:22-33）。死海の水面は海面下約400m。ということはマムレからおよそ1300mも下って、主はソドムの現実、その罪と、そこにうめき叫ぶ人のことを確かめようとされるのです。

このような時に、このような緊迫した事態を前にして、主なる神は、アブラハムとその子孫が正義を行うべきことを求められました。彼は「正義を行う」ことへの召命を受けました。ソドムの悪、ソドムの不義に無関心であることは許されません。

神の民イスラエルに対する主の召命は「正義を行う」ということでありました。そのことは初めから、アブラハムの時からこのようにはっきりとしていた、ということを知りました。旧約聖書全体を通じて「正義」ということは非常に重視されています。特に詩編やイザヤ書にはたくさんの例があります。いくつか例を見ましょう。

②詩編 37:28「主は正義を愛される。主の慈しみに生きる人を見捨てることなくとこしえに見守り、主に逆らう者の子孫を断たれる。」

③詩編 116:5「主は憐れみ深く、正義を行われる。わたしたちの神は情け深い。」

④イザヤ書 11:1-5「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊。彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」

これはさっきも聞いた言葉です。メシア預言の一つで、主イエスを指し示す大切な箇所でもあります。「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」は堅信式の式文に引用されている言葉で、主イエスに注がれ、主イエスを生かしていたその同じ霊が私たちにも注がれることを祈ります。救い主の働きは「弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する」ことです。この世界の現実の痛みや悪とは別に、というのではなく、まさにこの世界の中にある痛みや悪の支配の中で、正義の実現のために救い主は働かれるのです。

⑤イザヤ書 30:18「それゆえ、主は恵みを与えようとしてあなたたちを待ち、それゆえ、主は憐れみを与えようとして立ち上がられる。まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。」

「まことに、主は正義の神。」正義の実現をうめくように、渇くように切望している人々の思いがここにはこめられています。

ところが現実はどうか。

⑥イザヤ書 59:15「まことは失われ、悪を避ける者も奪い去られる。主は正義の行われていないことを見られた。それは主の御目に悪と映った。」

主イエスは「御心が天に行われるとおりに地にも行われますように」と祈るように私たちに

求められました。それはイエスが「御心が地に行われていない」ことをご覧になったからです。

ところで、かつてアブラハムに対して主が与えられた約束と使命に対して、その後の神の民イスラエルは繰り返し背き、それを踏みにじってきました。

後の時代、預言者エレミヤは、神がこのソドムとゴモラの町の名を挙げてこう語られるのを聞きました。

「わたしは、エルサレムの預言者たちの間に、おぞましいことを見た。姦淫を行い、偽りに歩むことである。彼らは悪を行う者の手を強め、だれひとり悪から離れられない。彼らは皆、わたしにとってソドムのように、彼らと共にいる者はゴモラのようなのだ。」(23:14)

そしてエレミヤは、もう一度神の民の出発点に、最初の召命にイスラエルを立ち返らせようとされる神の声を伝えています。

⑦エレミヤ書 4:2「もし、あなたが真実と公平と正義をもって、『主は生きておられる』と誓うなら、諸国の民は、あなたを通して祝福を受け、あなたを誇りとする。」

イスラエルが真実と公平と正義を踏みにじたので、みずからの祝福も台無しにし、諸国民の祝福も台無しにしてしまった。しかしもう一度、主はご自分の民を建て直そうとされる。

⑧エレミヤ書 7:1-6「主からエレミヤに臨んだ言葉。主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。『主を礼拝するために、神殿の門に入って行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住ませる。主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。……』」

立派な主の神殿を誇りにし、立派な礼拝を献げながら、現実には正義を踏みにじり、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げ、無実の人の血を流し、異教の神々に従っている。「このようなことを続けて、自ら災いを招いてはならない」と、主なる神はエレミヤをとおして呼びかけておられました。

ここまでをまとめます。主は正義の神であって、主がその民に使命として託されたことは、「主の道を守り、主に従って正義を行う」ということです。そしてそれは一般的、抽象的なことではなく、極めて具体的なことだ、ということ。苦しみが満ち、悪が支配しているこの世界にあって、正義を実現するために神は働いておられる。私たちはイエス・キリストによって召された新しい神の民です。私たちもまた「主の道を守り、主に従って正義を行う」という召しを受けています。それは、世界に対する神の祝福の器とされることです。

3. イエスが記憶した人々

旧約聖書に示されたこのように激しい正義への求めは新約聖書に流れこんでいます。新約聖書において「正義」と訳された箇所は必ずしも多くはありませんが、例えばこのような主イエスの言葉に注目したい。

- ①ルカ 11:42 「それにしても、あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。^{はっか}薄荷や^{うんこう}芸香やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。これこそ行すべきことである。」（マタイ 23:23 参照）

παρέρχεσθε τὴν κρίσιν καὶ τὴν ἀγάπην τοῦ θεοῦ· ταῦτα δὲ ἔδει ποιῆσαι κἀκεῖνα μὴ παρεῖναι.

「正義の実行と神への愛」——これこそ行すべきことだ、とイエスは言われます。マタイのほうでは「律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実。……これこそ行すべきことである」となっています。ところでこの言葉に続いて、非常に気になることがイエスの口から語られています。

- ②ルカ 11:50-51 「こうして、天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。それは、アベルの血から、祭壇と聖所の間で殺されたゼカルヤの血にまで及ぶ。そうだ。言うておくが、今の時代の者たちはその責任を問われる。」（マタイ 23:35-36 参照）

ここで気づくのは、イエスが歴史に関心を持っておられた、ということです。単に関心を持っていた、というのではなく、歴史に起こったあのこと、その人々のことを忘れては今の自分の生きることも働きも考えられない、というほどに、かつての出来事を胸に刻んでおられた。その人々を記憶するからこそ、今このように生きる。その人たちのことをイエスは自分の身にまとっておられた、と言ってもよいでしょう。そうでなければ、このイエスの言葉のものすごい激しさを理解できません。その人たちとは、「アベルの血から、祭壇と聖所の間で殺されたゼカルヤの血」と言われているように、不当に苦しめられ、殺されて、血を流して死んでいった人たちのことです。

アベルの殺害は聖書に記された最初の殺人事件です。あの創世記第4章の物語。アベルはその兄カインに憎まれ、野原でカインに撃ち殺されました。アベルの流された血が土の中から神に向かって叫びました。神はその叫びを聞いて、カインに「何ということをしたのか」と問われました。もう一つ、「あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血」というのは、歴代誌に出て来る話です（これとは別の説もあるようですが）。紀元前9世紀、主イエスよりも800年くらい前のことですが、ユダの王ヨアシュは家臣に命じて、主の神殿の庭で祭司ゼカルヤを石で撃ち殺しました。祭司ゼカルヤが神の霊に動かされて、

王の偶像崇拜を厳しく責めたからです。ゼカルヤは死に際してこう言いました。「主がこれをご覧になり、責任を追及してくださいますように」（歴代誌下 24:20-22）。これはヘブライ語の聖書（旧約）に出て来る最後の殺人事件です。

「アベルの血からゼカルヤの血」ということは、聖書（旧約）に記され伝えられた最初の殺人から最後の殺人までのすべてということです。多くの多くの人々がいます。その中には、士師記第19章に記されたベツレヘム出身の側女のことにも含まれているはずで、イスラエルにまだ王がなかった時代のこと。その女性は、何か耐えられないことがあったからでしょう。夫のところを去ってベツレヘムの実家に戻っていました。夫は彼女を連れ戻しに来ました。旅の途中、ギブアの町で日が暮れました。二人はある老人の家に迎えられて夜を過ごすこととなります。

③士師記 19:22-30「彼らがくつろいでいると、町のならず者が家を囲み、戸をたたいて、家の主人である老人にこう言った。「お前の家に来た男を出せ。我々はその男を知りたい。」家の主人は彼らのところに出て行って言った。「兄弟たちよ、それはいけない。悪いことをしないでください。この人がわたしの家に入った後で、そのような非道なふるまいは許されない。ここに処女であるわたしの娘と、あの人の側女がいる。この二人を連れ出すから、辱め、思いどおりにするがよい。だがあの人には非道なふるまいをしてはならない。」しかし、人々は彼に耳を貸そうとしなかった。男が側女をつかんで、外にいる人々のところへ押し出すと、彼らは彼女を知り、一晩中朝になるまでもてあそび、朝の光が射すころようやく彼女を放した。朝になるころ、女は主人のいる家の入り口までたどりつき、明るくなるまでそこに倒れていた。

彼女の主人が朝起きて、旅を続けようと戸を開け、外に出て見ると、自分の側女が家の入り口で手を敷居にかけて倒れていたので、『起きなさい。出かけよう』と言った。しかし、答えはなかった。彼は彼女をろばに乗せ、自分の郷里に向かって旅立った。家に着くと、彼は刃物をもって側女をつかみ、その体を十二の部分に切り離し、イスラエルの全土に送りつけた。これを見た者は皆言った。『イスラエルの人々がエジプトの地から上って来た日から今日に至るまで、このようなことは決して起こらず、目にしたこともなかった。このことを心に留め、よく考えて語れ。』」

士師記はこの物語の結びに、この事件を知った人々の言葉を記しています。「このことを心に留め、よく考えて語れ。」イエスは、この人のことを心に留めておられたはずで、この名も知れない女の人の声なき叫びを聞いておられた。イエスの中に、その人の血の叫びがこだましていた。イエスは、不当に踏みにじられ、殺されていった人たちのことを記憶しておられた。その人たちの死を忘れたり、無駄にしたりすることは断じて許されないと、激しく誓っておられた。そういうことではないでしょうか。

律法の中で最も重要な正義と慈悲と誠実、正義の実行と神への愛。これをおろそかにし、

罪なき人々の貴い血が流されてもこれに抗議の声を挙げず、かえってこれを正当化してきたそのような歴史の責任が今のあなたがたにふりかかる。今のこの時代の者たちが、流された血の責任を問われる、というのです。

かつて主なる神は、アブラハムの時、神の民を「正義を行う」ことへと召されました。そしてその時、正義を踏みにじっていた町ソドムは神の審判によって滅ぼされました。はるかに時代は下って、主イエスは悔い改めのない町をこのように責められた。

「……カファルナウム、お前は、天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。お前のところでなされた奇跡が、ソドムで行われていれば、あの町は今日まで無事だったにちがいない。しかし、言うておく。裁きの日にはソドムの地の方が、お前よりまだ軽い罰で済むのである。」（マタイ 11:23-24）

ところで、ソドムよりも、カファルナウムよりも、日本の罪は軽いのか。これが、今の私たちの問題です。

ここで私たちは、遠い昔のどこかのことではなく、あの韓国ほかアジア諸国に対する植民地支配、アジア・太平洋戦争においてわが国がなしてきたことに直面させられるのではないのでしょうか。ソドムの罪は広く、単に性的犯罪ではなかったと思われまます。しかしソドムの広範な罪の中に性的犯罪も含まれていたとすれば、日本という国がなした広範な罪の中に、性的犯罪が、日本の侵略戦争のためにアジアの女性たちを性的奴隷（「慰安婦」）として踏みにじった犯罪が含まれていることを忘れることはできません。その人たちの叫びをイエスは聞いておられるはずです。そして、その時代にあって、私たちの教会、日本聖公会がどのようなあり方をしていたかを振り返ることは、誰かに強いられてではなく、自らの責任としてなすべきことではないのでしょうか。

宣教協議会のために用意された資料を実際に見てみましょう。まず『支那事変特別祈願式』（「歴史を生きる教会——ワークブック」10頁）。日中戦争開始3ヶ月後の10月2日、日本聖公会教務院が全国の教会で用いるようにと配布した礼拝式文です。日本政府の指示に沿ったものでした。

「此式ヲ早・晩禱ニ代用スル事ヲ得」

説教については次のように定められています。

「『国民精神総動員』ノ趣旨併セテ非常時信徒ノ本分ニツキ説教ヲナス」

これだけでも大変なことではないのでしょうか。説教は神様の意志を示すものではなかったのか。それがいつから国家の意志を示すものになったのか。これは神様への背信行為です。このことの重大さにおののかなくてよいのか。

「我ら天皇陛下のため祈るべし

天地の主なる神よ。願くは恩恵をもつて僕らの祈禱をきこしめ聴召し、我が今上天皇をさきわひ、

聖霊をもつて導き、御力をもつて護り給へ。……願くは陰謀・反逆・その他平和を妨ぐるもの絶えて無からしめ、宝算（天皇の年齢）永く、宝祚（天皇の位）遠く栄え、終に限りなき生命の冠冕を受くることを得させ給へ。主イエス・キリストに頼りて冀がひ奉つるアアメン」

「我ら銃後に在る者のため祈るべし

全能の神よ。今われら銃後にある者のために祈り奉つる。願くは挙国一致、堅忍持久、総ゆる困難を打開して所期の目的を貫徹することを得させ給へ。願くは常に事態の推移に即して、直ちにこれに応ずるため、絶えず献身犠牲の覚悟に欠くる所なからしめ給へ。…

…」
もう一つ、日本聖公会祈祷書の紀元節特祷（「歴史を生きる教会——ワークブック」66頁）。

「天地の主なる神よ。主は往古より万国を治召し、その盛衰をつかさどり、稜威と栄光とを顕し給へり。殊に我国を恵み、建国の偉業を成就せしめ、今日に到らせ給へることを感謝し奉る。今この佳節に方り、皇祖皇宗の威徳を懐ひ、宝祚の長久・国運の隆昌を祈り奉る。願くは国民挙りて責任の重きを感じ、祖先の忠誠を顧み、献身犠牲の精神に生き、只管国威の発揚と共に、全世界の平和と・万民の幸福とに尽すことを得させ給へ。これらの祈願を讃め称ふべき救主イエス・キリストの御名に頼りて献げ奉る。アアメン」

これは、アベルの血からゼカルヤの血を記憶された主イエスの道とは全く異なったものです。これらの祈りや礼拝は、血を流させてきた中心的存在である天皇への忠誠を、神の名によって求めるものです。天皇制国家に尽す責任、「献身犠牲の精神」を説いています。その時は国家の力に強制されてそうせざるを得なかったのだとすれば、なぜその力が打ち砕かれた時に、涙を流して嘆くことができなかつたのか。私たちの教会は祈るべきでない祈りをし、隣人の苦しみをいっそう増し加えることをした。50年前にそのことを懺悔しなければなりませんでした。それを50年の間放置してきた。こういうことは「社会派」の問題ですか。信仰の問題ではないのですか。

昨晚、大韓聖公会の洪曼姫さんの証言を聞きましたが、その中で日本政府のやり方について触れて、「謝罪する内容もはっきりしないような言葉だけの謝罪などしてもらいたくない」と言われたことが心に残っています。私たちの教会も同じことを言われているのでしょうか。中途半端にかっこうだけするならしないほうがよい。歴史の反省をするなら本気でしたい。

歴史を振り返るとすれば、今私たちは誰のどんなことを記憶しなければならないのか。私たちにとってのアベルとは誰か。私たちにとってのゼカルヤとは誰か。私たちにとっての士師記第19章の女性とは誰のことでしょうか。強制で軍隊「慰安婦」とされた人たちのことを思います。その人たちの叫びを聞こうしないことは、主イエスを受け入れようとしな

とではないでしょうか。しかし反対に、その叫びを聞くことは、主イエスを受け入れることではないでしょうか。私たちは、神と隣人の前に、私たちの教会の事実と直面しなければなりません。私たちの誤りを告白、懺悔しなければなりません。歴史への責任を考えるなら本気で歴史の事実と直面しようではありませんか。

神の民は、神の最初の召命に、あの「主に従って正義を行う」という召命に逆らったままでは生きることができない。イエスの弟子は、イエスから離れたままでは生きることができないのです。

4. おわりに——イエスの死を体にまとう

ルカによる福音書第11章から、主イエスご自身が歴史を心に刻み、踏みにじられ、殺された人々をご自分の身にまどっておられたことを思いました。ところで、私たちはイエス・キリストを信じる者として、イエス・キリストに従おうとする者として、イエスのことを心に刻み、イエスを身にまとう者であります。イエスご自身が、踏みにじられ、殺された方です。パウロはこう語っています。

①Ⅱコリント4:7-11「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。」

2Co 4:10 πάντοτε τὴν νέκρωσιν τοῦ Ἰησοῦ ἐν τῷ σώματι
περιφέρουμεντες, ἵνα καὶ ἡ ζωὴ τοῦ Ἰησοῦ ἐν τῷ σώματι ἡμῶν φανερωθῇ.

「イエスの死」の「死」と訳された言葉は「殺すこと」「殺害」というニュアンスの言葉です（C.K.Barrettの訳——We are always carrying about in the body the killing of Jesus.）。

イエスの死を体にまとう。それは苦しく辛いことではあるけれども、しかしそこに、それをまとう私たちの体に、イエスの命が現れる、というのです。そしてイエスを記憶することは、イエスご自身がその身にまとうように記憶しておられた、命を奪われた人々のことを記憶する、ということと一体です。そしてそれは、イエスの命に共にあずかる道なのです。

②要点

最後に、要点を三つ。

第一は、私たちは神の民として「主の道を守り、正義を行うこと」へと召されている、ということです。私たちの教会はこのことを長く見失い、誤りを犯して来た。しかし、私たちの具体的な反省と、懺悔、告白を通して、神は新しく「正義を行う」ことへの召しに応えるようにと、私たちを促しておられるのではないのでしょうか。それは共に祝福にあずかる道です。

第二は、叫びを聞くことなしに私たちの働きはない、ということ。主イエスは歴史の中の苦難と死、不当に殺された人たちを身にまもっておられた。私たちも歴史から目をそらさず、歴史の責任を引き受け、人の叫びを聞き続けるものでありたい。このことを離れてイエスの宣教と働きはありませんでした。私たちも同じではないでしょうか。

第三は、イエスの死を、イエスが殺されて死なれたことを、自分の身にまとうこと。それは、歴史の中で死んだ人々、殺された人々のことを記憶することと一つである、ということ。これは辛いことであるけれども、それこそがイエスの命にあずかる道である、ということです。